

チベット文献研究への道しるべ (二)

稲葉正就

一、佛教学研究におけるチベット文献の利用

佛教学の近代的研究の発展過程において、「チベット訳大藏経」が登場して果たした役割には、めざましいものがある。それでは、なぜチベット訳大藏経が重要な役割を果たしたかという点から述べてみよう。

昔から佛教学研究は、漢訳大藏経を中心として行なわれて来た。漢訳大藏経には、大正新修大藏経という、前三二巻の中にインド撰述の経と論が一六九二部収録されている。ところがチベット訳大藏経には、大谷大学図書館所蔵の北京版でいうと、影印本の前一五〇巻の中に経が一〇五五部、論が三九六二部、合計五〇一七部も収録されていて、その中に同じ経や論が重複していたりチベット撰述や中国撰述が少し入ってはいるが、殆んど五

〇〇〇部近いものがインド撰述である。チベット訳大藏経の方が漢訳大藏経に比べて、インド撰述の経論が三倍近くも収録されている。すなわち、漢訳大藏経の中にある重要な佛典は、たいていチベット訳大藏経の中にあるばかりではなく、漢訳にないものがチベット訳には豊富に見出されるのである。したがって、チベット訳によれば先人未見の新資料としての経や註釈書を手にすることができるわけである。

次に、チベット訳大藏経の文章は佛典チベット語・Classical Tibetanで翻訳せられている。インドのサンクリット文佛典がチベット文に翻訳せられていったとき、チベット語は未だ発達していないことばで語彙が貧弱であった。そこで普通ならば時間というものが自然に語彙や文法を作るものであるのに、佛教受容を急いだた

めにそういう時間的な余裕がなかったから、人工的に語彙を制定して artificial language (人工語) をつくりあげた。すなわち、サンスクリット文の上にチベット語を貼りつけるように直訳して、サンスクリット語の透写的な態に翻訳してしまった。翻訳事業は八世紀中頃から数百年に亘って行なわれたが、八一四年頃に訳語が訳者によってまちまちであっては学習に不便であるからとして、王の命によって翻訳名義大集という梵藏辞書を編纂した。そして以後の翻訳はこれを基準として訳出し、以前の翻訳でこれに合致しないものは翻訳を訂正した。事実、チベット訳大藏経を見ると、ペルツェク (Dpal brtseg) という訳者が多くの経論を校訂している。それ故にその訳文は、訳者によって多少の巧拙は免れないとしても、ここに用いられている訳語が統一されている。したがってチベット訳を読むことに熟達すれば、逆に翻訳名義大集によってサンスクリットの原語へ還元できる道理であって、サンスクリット原典が髣髴として浮び上ってくるのである。その点では、漢訳大藏経は、訳者によって新訳旧訳の大きな相違があつて訳語の統一がなされていない。そしてなお文化の濃度の高い中国語をもって漢文化的に概念が規定せられていったから、文化の主体的性格は強

く表わされているが、サンスクリット原文を想定しながら読むことは困難である。

このような特色をチベット訳大藏経が有しているので、それを佛教学研究に利用するわけである。先ず、サンスクリット原文が既に発見されている佛典を研究するときは、チベット訳を対照してゆくと、しばしばサンスクリット文における書写の誤りや欠落などが明瞭にわかることが多い。したがってサンスクリット文を正しい態に校訂するためには、その直訳であるチベット訳が最もよい参考資料となる。ドゥ・ラ・グレイ・ブーサン (de La Vallée Poussin) が校訂した月称・中論積の如き、またわが国の荻原雲来博士が校訂した称友・俱舍論疏の如き、チベット訳を参照してサンスクリット原典の立派な校訂本が出版せられている例は数多い。なかでも、山口益先生が校訂出版せられた安慧・中辺分別論積疏の如きは、終りの数葉を除いて殆んどすべての頁の各行三分の一弱が欠落し、全八五葉中の三葉までも失なわれたサンスクリット写本をチベット訳 (大谷影印北京版 No. 534; 東北デリゲ版 No. 4032) によって完備されたのである。もしチベット訳がなかったならば、如何に有能な先生と雖もなし遂げることはできなかったであろう。それほどチベッ

ト訳の有する価値は大きい。このようにして、先学が既に校訂を了ったサンスクリット原典をわれわれが読む場合に、漢訳とチベット訳を対照してゆくならば、いわゆる諸訳対照研究という有力な研究方法で解説することができるわけである。

次に、サンスクリット原典が未だ発見されていない佛典にあつては、もし漢訳があつてもチベット訳を読む必要がある。というのは、前述のように漢訳からはサンスクリット原語を想定することはむづかしいが、チベット訳からはそれが比較的容易であるから、佛教の根源であるインド的な理解をなす上にチベット訳が非常に役立つからである。

なお、サンスクリット原典が未だ発見されず、漢土にも伝わらず、ただチベット訳だけが現存する佛典が相当多いのであるが、それらチベット訳は先人未踏の分野をわれわれに提供してくれる。殊にチベット訳だけのものにはインドの高僧が著した註釈書の類が多く、その中にインドの人でなくては考え及ばない解釈が施されている。例えば、漢訳大藏経の中に、毘目智仙訳・業成就論（大正 No. 1608）なる旧訳と、玄奘訳・大乘成業論（大正 No. 1609）なる新訳とがある。これのサンスクリット原典は

未だ発見されていないが、チベット訳（大谷影印北京版 No. 5563；東北デリゲ版 No. 4062）があるので、諸訳対照研究ができる。しかしこの論は業に関する世親の名著で実にむづかしいものである。ところが山口益先生は、チベット訳だけしか現存しない善慧戒（*Sumatigāla*）作の業成就註疏（大谷影印北京版 No. 5572；東北デリゲ版 No. 4071）に目をつけられて、この註釈書を読破し、「世親の成業論」という立派な業績を発表せられた。また山口益・野沢静証訳「世親唯識の原典解明」などを見てもらえば、チベット訳の註釈書の価値はまことに筆舌に尽し難いものがあることがわかるであろう。あたかも戦いにおいて今まで相手が全く予想しなかつた新兵器を持ち出して来たようなものである。しかしながら、チベット訳だけしか存在しないものを読破するには、余ほど佛典チベット語に熟達しななければできないことを銘記すべきである。

なお、次に述べる藏外文獻の中に、インド撰述佛典に對するチベット人の著した註釈書が存在する。この分野ではまだ殆んど誰も手をつけていない。将来はインド佛教を研究する者でも多少は読まねばならないことになるだろうと思うが、チベット訳大藏経の中にまだまだ研究

しなければならぬものが非常に多いから、ここに述べたことを割愛する。

さて、チベット訳佛典の有する価値をほぼ理解してもらえたことと思うから、次にそういうチベット訳佛典を読んで佛教学を研究しようと思う者は、まずチベット語を学習しなければならぬことを述べよう。チベット語はそれらを解くための鍵であり、武器でもある。鍵がなくては無尽蔵なるチベット文献の宝庫の扉を開けることはできないし、また武器なしでは研究という戦いにおいて勝利をおさめることはできない。それがために大ていの佛教の大学ではチベット語の講義を設けているのである。

ところで、インド佛教を専攻しようとする者は、サンスクリット佛典を読むことが本務であるから、当然サンスクリット語を知悉する必要がある。したがってサンスクリットとチベットとの二つの言語を学ばねばならないことになるが、その場合むしろサンスクリットの方に何倍かの力を注いだ方がよい。というのは、チベット訳は原文がサンスクリット文であつて所詮翻訳文であるから、もとの言葉をしっかりと身につけなくては完全に理解ができないからである。例えば、英文学を研究するのに、

如何に立派な和訳を読んでも和訳だけで英語を学ばなければ、英文のニュアンスを理解することができないのと同様である。それと更にもう一つの理由は、サンスクリット語の方がチベット語より非常に複雑でむつかしいからである。したがつてサンスクリット語の学習の方に数倍の時間をかけねばならないわけである。それではサンスクリット語とチベット語のどちらを先に学習した方がよいか。もちろんサンスクリット語を先に始めた方がよい。具体的にいうと、二回生のときからサンスクリット語を始め、三回生でチベット語をやるのがよいということになる。ところが、現実問題として三回生でチベット語を始めたのでは、初歩の文法だけしかわからずに四回生になつてすぐ卒業論文を書かねばならない。その時にチベット語の読解力ができていなくて役に立たない。そういう点からいうと、二回生のときにサンスクリットとチベットの二つのことばを同時に始めれば、四回生になつて両方とも役に立つことになつてよろしい。しかし英語とドイツ語、あるいはフランス語で苦しんでいる二回生のときに、更にその上にサンスクリットとチベットの二カ国語をやるということは過重である。過重に違いないが、勇猛心をふるいおこしてやつてほしい。いままで

この方法で何人かの学生がやり遂げた例を、わたくしは現に見ているのである。ところがこの行き方をとって三回生になったとき、チベット語の方が比較的やさしいから、難解なサンスクリット佛典を読むとき、そのチベット訳を対照するとチベット訳文で一応の意味がわかってしまうので、往々にしてチベット訳でサンスクリット原文を読んでしまう結果になりやすい。すなわち、チベット訳をいわゆる虎の巻として利用することになる。そうになるとサンスクリット文を読む能力ができないから、せっかく二回生のときの非常な努力が却って仇となる。あくまでサンスクリット文テキストはサンスクリットだけを読み、そのチベット訳は後で参照してサンスクリット文をどのように翻訳しているかを参考として見るだけにとどめていただきたい。そしてサンスクリット文が未発見であるチベット訳を読むときの力をつけるのみの目的としてチベット訳を見てほしい。

それでは初歩の人は、どういふものから読み始めればよいか。先ず経としては、般若心経や能断金剛般若経の梵藏漢を対照して読むのがよい。論としては、月称の中論積を梵藏対照して読むのがよいが、第一章はむづかしいから第二章か第三章以後より始めるがよい。全く初歩

の方は、これらの梵文の和訳があるからそれを手がかりとして始められてもよいであろう。これらの経論には、現在・過去・未来や能動・受動が頻繁に出て来て、チベット訳も三時二動を区別してよく翻訳されているから、非常に為になる。教章ずつほど読めば、チベット訳の翻訳形態が一応わかるから、本誌に連載された「インド佛教への道しるべ」によるとか、「山口益佛教学文集」などの諸先生先輩の労作を見るとかして、どういふ佛典の研究へ進むかを考えればよい。その際に注意しなければならぬことは、よほど佛典チベット語に熟達しなければ読めないものや、熟達してもなかなか読みこなせないほどむづかしいものがあるから、どのチベット訳でも読めると思ってはならない。とくに先生や先輩に相談してテキストを選ぶべきである。

二、チベット史に関する文献の研究

上来、佛教学研究におけるチベット訳大藏経の有する役割について述べた。ところが、厳密にいうと、それはチベット文献であるチベット訳大藏経を、佛教学研究のための補助資料として利用するということである。その研究の目的は主としてインド佛教学研究にあるのであって、

直接チベットに関する研究を志すものではない。

ところが、チベット文献には、チベット訳大蔵経だけでなく、その大蔵経に収録されていないもの全部を総称して、いわゆる「蔵外文献」なるものが存在する。蔵外文献には、高僧や宗派や学派などの全書と単行本とがある。例えば、プトン(Bu ston, 1290-1364)という高僧の著作を集めたものをプトン全書といい、元朝時代にチベットを支配したサキャ派(Sa skya pa)の歴代の高僧の著作を集めたものをサキャ派全書と呼んでいる。また歴代のダライラマやパンチェンラマの全書もある。また全書ではなく、一部だけ或は一部数冊の単行本もある。前述のチベット訳大蔵経はプトンによって編纂せられたのであるが、それに収録されている佛典をチベット人が読んで研究した成果が蔵外文献の大半を占める。したがって蔵外文献はチベット人の著作であって翻訳文ではない。またプトンの時代に大蔵経が編纂できるほど多くの佛典が翻訳されたっていたので、それらの佛典によってチベットの学僧の佛典研究が活潑になった。勢いチベット人の著作はプトンの第一四世紀頃より急速に増加していったのである。したがって蔵外文献は概してチベット訳佛典より成立の年代がおおそいものが多い。しかしながら、

インド撰述の佛典でも単行本の形態で出版されたものは、厳密には大蔵経の中の佛典の異版として大蔵経の中に入れるべきであるが、便宜上より蔵外文献の中へ含めて取扱っている場合がしばしばある。例えばわが国でも市井の書店で出版された浄土三部経や般若心経や観音経を必ずしも大蔵経の中に入れて保管していいのと同じである。

さて、このような蔵外文献の中の全書には、歴史書や高僧の伝記などが含まれている。例えば、プトン全書の中に、「善逝の教について明らかならしむる『法の源泉、経言の宝藏』という書」(東北蔵外 No. 519D)、すなわち、通常「プトン佛敎史」と呼ばれている歴史書が収められている。これは、もともと歴史書として書かれたものではなく、チベット訳大蔵経を編纂したプトンがその目録をつくって、そのような多くの佛典が出来た由来を述べて目録の前につけた序論である。その書名「法の源泉」(Chos kyi hbyun gnas)が示す如く、それはインドにおける積尊の説法よりチベット訳大蔵経成立までの佛敎の消長の記述であり、それがすなわちインド・チベット佛敎史というべき内容を備えたものになったのである。これがチベットにおける最も古い史書であり、以後の史

書は大体この形態を踏襲している。

また、伝記については、例えば歴代ダライラマ全書の最初にそのダライの伝記が付けられている。ダライが逝去すると次のダライの初期に編纂官が選ばれて前ダライの伝記がつくられた。おそらく中国における正史の編纂をまねたのであろう。とにかくダライを中心として、そのダライの一代の間に起った事柄がわかるのである。

このように全書の中に収められている歴史文献のほかに、単行本の歴史書ももちろん存在する。例えば、クンガードルヂェ (Kun dgah rdo rje) 作のフッラン史 (Hulan Deb ther 赤冊) の如きは、書写で伝えられ未だ版木による出版がなされたことがないので入手困難なものであった。この書は元末の二三四六年の著作であるから、元時代の記述は正確であろうとして世界各国の東洋学者によって探し求められていた。ところがわたくしは幸運にも一九五八年にインドのシッキム (Sikkim) へ立寄った際、デンサパ氏 (T. D. Densapa) の好意によってその写本をフィルムにおさめることができたときは躍りあがりなばかりの喜びを覚えた。このテキストは草書体で書かれ甚だ前半が読みにくいものであったが、その後一九六一年にシッキムにある Nangyal Institute of

Tibetology から The Red Annals, Part I として活字

出版せられた。わたくしは、佐藤長博士の協力によって一九六四年に和訳を上梓することができた。この書は、ブトン佛教史よりわずか二五年ほどおかれて著作されたから、佛教史という形態を踏襲しているが、中国その他の国の資料を参照して正確を期しようとした点に注目すべきものがある。この仕方は一四七八年にシヨンスペー (Gshon nu dpal) によって著作完成されたテプテルゴンポ (Deb gter shon po 青冊、東北蔵外 No. 7036) に確実なうけ継がれた。すなわちシヨンスペーは特に年次の正確を期するために中国資料を参照し、時にはそのために却って誤っていることもあるが、とにかく今日われわれが考えているような歴史書を編纂しようとした。この書は版木で印刷された単行本であるからわが国でも早くから東北大学や東洋文庫に将来せられていた非常に有益な史書である。

このような蔵外文献は、フッラン史のように最近までその存在さえわからなかったものもあるが、大部分はチベット訳大蔵経と時を同じくして発見されていた。しかし佛教学者が大蔵経を利用するのに急であつたためか蔵外文献の研究は確かに数十年おくれた。ところが、第二

次大戦後の一九四九年に画期的な大成果が発表された。大戦直後イタリアのツッチ教授 (G. Tucci) が、二回もチベット探険を敢行し、ネパールやシッキムなどチベット周辺を数回に亘って探険して、チベット訳大藏経や蔵外文献その他古文書やタンカや碑銘の類など貴重な文献を驚くほど多数入手した。そしてそれらを研究して“Tibetan Painted Scrolls”三冊の大研究を出版した。それは書名の示す如くタンカの研究を目的とするものである。タンカとはわが国の掛軸を短かくしたようなもので、佛像や高僧やその物語などの佛画が多い。タンカの写真は第三冊目に集められていて、チベットの佛教美術を研究しようとする者にとって誠によい資料である。前二冊は最初にチベットの中世以降の歴史研究より始まり、次にいろいろの文献が紹介せられ、タンカの歴史的發展などが述べられている。タンカ以外に歴史研究にも有益な文献と研究で埋まっているので、チベット学界を刺激することになった。それ以来特にチベット文献を中心とする歴史研究が洋の東西を問わず一躍活潑化するに至った。

これらの研究が東洋学において果す役割は、従来の東洋史学では中国資料を用いて中国側から眺めるだけであ

ったが、いまやチベット文献を駆使してチベット側から眺めることができるようになったということである。そこに両側の資料の対照研究という学問的な方法をとるようになったことは、歴史学としてまことに喜ばしいことである。その結果、今までの東洋史学研究では明確にわからなかった一面を解決できることがしばしばある。特に中国とチベットとモンゴルの交渉史においてチベット文献が果す役割は大きい。

さて、それではこの分野の研究をしようとする者は、チベット語と歴史書に記されている漢文との二つの外国語をマスターしなければならぬ。先ずチベット語の学習はなるべく早く始めていただきたい。だから二回生のときにチベット語の初歩を始め、三回生ではチベット語の講読や演習に出席してどしどし読解する実力を養成してほしい。そうすれば四回生になってチベット文献を使ってチベット史らしい論文ができ上がるであろうからである。もし万一、二回生のときにチベット語を全く学習しなかった人は、三回生になってチベット語初歩を始めるとともに無理でもチベット文の講読に出席して努力すれば、三カ月後には少しはわかるようになるから、自分で努力してほしい。文献の原文は、前述の如くチベット

人の著作であって翻訳文ではないから、サンスクリット語をそれほど必要としないが、しかしインド文化を受容してチベット文化をつくったのであるから、サンスクリット語の初歩ぐらいいはいつでもよいから聴いておく方がよい。複雑なサンスクリット文を一生懸命に学習しなくてもよいのならやさしいではないかというかも知れないが、決してそうではない。その代りに漢文を読むことに相当な努力を払わねばならない。チベット史は、中国との交渉史といってもよいほどであるから、中国の歴史資料と対照しながら研究を進めなければならない。しかしチベットの建国は唐初であるから、唐以後の資料でよい。すなわち、新旧両唐書、明史、明実録、清実録などのチベットに関する部分を必要に応じて読まねばならない。それ故に東洋史学を或る程度学習する必要がある。それでは初歩の人は、どういうチベット資料から読み始めればよいか。先ず何といつてもブトン佛教史のチベットの部分を読むべきであろう。前述の如く、これはチベット訳大藏經の目録の前に付けられたものであるから、訳経史を知るために最もよい文献である。そのチベット原文は、まだ近代的な形態で出版されていないが、大谷大学、東北大学、東洋文庫などにある。E. Obermiller

の英訳：History of Buddhism by Bu-ston. Heidelberg, 1931. を参照すればよい。次にフッラン史のサキヤ派の部分が元朝とチベットとの交渉研究のよき資料として一読すべきであろう。この書については既に前述の如くである。次にテプテルゴンポは宗派や学派の記述に正しく詳しいから、その必要などころを一章か二章読まねばならないが、原文は近代的な書物として出版されていないので、東北大学か東洋文庫で写さねばならない。G. N. Roerich の英訳 "The Blue Annals. Calcutta, I. 1949, II. 1953." があるから非常に便宜である。

また、伝記としての研究は、D. S. Ruegg: "The Life of Bu ston Rin po che. Rome." (Serie Orientale Roma, XXXIV.) があるのみであるが、この書の中にブトンの伝記のチベット原文が付けられ、英訳されているから対照して読むことができる。

また、年表としては、L. Chandra: "Dpag-bsam-ljon-bzan. New Delhi, 1959." (Satapitaka vol. 8) が出版されている。これはスムパケンポ (Sum pa mkhan po, 1702-1776) の著作であるバクサムジョンサン史に付けられている年表だけを筆写し印刷したもので、これに対する研究も翻訳も未だなされていないが、少し馴れば用

い方がわかって非常に有益なものである。

以上の史書や伝記を読めば、それらのチベット文の形態が一応わかるであろう。そこで前述の G. Tucci: "Tibetan Painted Scrolls." に多くの文献の紹介や研究がなされているから、それを見てどういふ文献の研究へ進むかを考えればよい。しかしその際に、非常に古い文

献例えば、*Sba bshed* (R. A. Stein: *Une chronique ancienne de Sam-yas*, Paris, 1961) や、その反対に時代のおそい編纂の伝記などは、難解なチベット文のものが多いから、自分の語学力に応じたものを選ぶよう心がけていただきたい。